

庶民のための書き言葉を求めて

——清末から民国へ

蒲 豊彦

はじめに	3
I 五港開港以前	4
II 近代中国語を求めて	9
III 民国期	15
おわりに	19

はじめに

現在の標準的な中国語は、北京語音を標準音とし、北方語を基礎方言とし、文字は漢字を簡略化した簡体字を使用するものとなっている。このようないわゆる漢語が成立するまでには、長期にわたる議論と実践の歴史があった。五四時期の文学革命、国語統一論争、1930年代の大衆語論争、新中国成立後の政府による言語政策などがその代表的なものである。また一方、清末以来、プロテスタント宣教師を中心とする西洋人も中国の言語問題に取り組み、とりわけ漢字に代わる表記法を模索してきた。それは中国人信者を教育するためだったが、そのなかで識字、教育、標準語、社会の近代化など、言語をめぐる中国社会のさまざまな側面に注意を払っており、かれらの視野は、かならずしも「キリスト教の布教のため」という狭い範囲にとどまるものではない。そして、そこで現れた議論は、のちに中国人自身によって論じられることになるものと、おおくの共通点がある。

ところが従来、文字改革をめぐる清末の在华西洋人の動きについては十分な整理がなされず、したがって、それを念頭においたうえでその後の中国人自身による言語改革が検証されることもなかった。村田雄二郎は国語統一論争の重要性の一端を、「一九三〇年代、五〇年代の言語改革論争で問われたのも、実は基本的に五四国語統一論争と同型の問題で

あった」と述べるが⁽¹⁾、しかしこれは、清末以来の在華西洋人による文字改革に、さらには、1830年代にイギリス植民地下のインドで発生したローマ字論争にも遡りうるものである。

在華西洋人が考案した表記法の言語学的特徴や、それら相互の継承関係などについては、閩南語にかんしてはかなりの研究の蓄積がある。しかし、在華西洋人による中国の言語をめぐる議論全体についての本格的な研究は、筆者の知る限りド・フランシスのものがあるのみである⁽²⁾。かれは、マテオ＝リッチ、ニコラス＝トリゴー、ロバート＝モリソンらの仕事を概観したうえで、1850年代の前半からまず中国東南沿海部でローマ字化の試みが始まったことを明らかにする。やがてそうしたなかから、言語改革と社会変革とを結びつける考えが現われるが、宣教師たちは中国の内的な秩序に変動を呼びおこすようなことを唱えることに躊躇した。そのようなとき中国人が文字改革に興味を示し始めたため、宣教師はいわばこの仕事を中国人にゆだね、その表面から退いていったのだという。

だがこれは、中国語の表記問題をめぐる当時の議論のごく一部にすぎない。これにたいして本稿では、モリソン時期から清末にいたるそうした議論を整理しながら、ローマ字化という考え方の出現、表記法の改良、口語の浮上、そして統一的な表記システム策定にいたる道筋を明らかにし、さらに民国期に入って、そうした努力が突如として無に帰した経緯を跡付けてみたい。

なお本稿では、おもにプロテスタント宣教師の動きを中心として論じ、カトリックについては触れない。かれらは文字改革にあまり熱心ではなく、その点でとりわけ清末のカトリックの動向には、とくに見るべきものはないように思われる⁽³⁾。また本稿の資料としては、19世紀の在華西洋人の動向を経時的に検討する際の基本的資料である *The Chinese Repository* (1832-1851) および *The Chinese Recorder* (1867-1947) を中心としながら、あわせて当時出版された各種辞書や宣教師の著作などを使用する。

I 五港開港以前

1 最初期宣教師

中国にやってきた最初のプロテスタント宣教師はロバート＝モリソン (Robert Morrison) だとされる。その聖書訳に注目してみると、モリソンは、あまり教育を受けていない普通の人々を視野に入れて、あえて口語的な文体を採用した。だが、漢字そのものまで捨てることはなかった。かれは、「中国の口語を漢字なしで伝えることは実行不可能ではないが、しかし、それは困難で、おおくは学習者にとってやっかいなものである」と

いい、口語のローマ字化には懐疑的だったが⁽⁴⁾、それにとどまらず、漢字に頼らねばならないもっと積極的な理由があった。かれはそもそも、東アジア、東南アジア全域を対象とするガンジス以東伝道会 (Ultra Ganges Mission) の構想を抱いており、言語にかんしては、「書かれた中国語」を使えばこの全域で布教が可能になると考えていたのである⁽⁵⁾。

ド・フランシスは、とくに根拠は示していないが、モリソンが1834年に死亡するころまでは、中国語はかならず漢字で表記されねばならないものであるという点で、専門家、非専門家を問わずほとんど意見が一致していたという⁽⁶⁾。このような認識が容易に揺らがなかった背景には、中国の言語が伝統的に漢字で表記され、またそれが中国以外でもひろく理解可能であったという事実のほかに、初期の宣教師たちが中国人の識字率をしばしばかなり高く見積っていた、という事情があったと思われる。モリソンの後継者とも評されるメドハースト (Walter Henry Medhurst) は、「中国で文字を知っている人の数は、驚くほど大きい。男子の半分が読むことができ、…」といい⁽⁷⁾、アメリカからの最初の宣教師であるブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman) とアベール (David Abeel) もそれぞれ、中国人は「本好きな人々」であり、「読書をする人々」であるという⁽⁸⁾。五港開港後、こうした認識はしだいに訂正されていくことになる。

2 ローマ字化の提唱

1834年8月、中国語の権威であったモリソンが死亡した。その後まもなく、同年12月の *Chinese Repository* 3(8) 上に、ローマ字中国語の可能性に言及する無署名の書評が現われる。書評の対象となったのは、当時インドで発生していたローマ字化論にかんする資料集 *Select papers on the subject of expressing the languages of the East in the English character, extracted from the periodicals published at Calcutta, in ..., Serampore Press, 1834* である。評者は、このローマ字化の可能性はビルマ語、シャム語、ジャワ語、さらには日本語にも及ぶものと考え、さきに引用したローマ字化についてのモリソンの疑念を示しつつ、「そうした意見の正しさについてはいささかも疑問の余地はないが、数年のうちに、中国の文字がローマ字に取って代られることになったといわれても、驚くことはないだろう」と、微妙な言いまわしで書評を締めくくった⁽⁹⁾。翌1835年5月、同誌4(1) はローマ字化がインドで進展していることをかさねて紹介した。こうして、すくなくとも *Chinese Repository* を見る限り、漢字のローマ字化をめぐる中国での議論は、インドの状況の紹介という形でまず提出される。

ここで、インドの様子を簡単に紹介しておきたい⁽¹⁰⁾。1830年代の中頃は、植民地行政が、インドに一定の敬意を払うオリエンタリズム的なものから、その文明を野蛮で未開なもの

と見なして、西洋の文明による変革を目指す方向へと変化する、転換期にあった。それは教育行政面では英語の導入をめぐる英語教育論争となって現れ、論争の一環として1834年1月、植民地行政官のトレヴェリアン（Charles Edward Trevelyan）がインド現地語（vernaculars）のローマ字化を提唱した。インドの文字をローマ字に置きかえることが提案されたのは、初めてのことであった。これにたいしておもにオリエンタリストたちが反論し、1837年頃まで論争が続く。前記 *Chinese Repository* が書評の対象としたのは、1834年に出版されたばかりの、この論争の資料集である。

トレヴェリアンは植民地行政官としてのみずからの最重要課題を大衆教育においており、そうした観点からローマ字論を展開する。まず、ローマ字が世界的な普遍性を備えていることを説き、そしてローマ字に切りかえることの利点として、つぎの5点をあげた。(a) 文字の読みやすさ、(b) 印刷の経済性と速さ、(c) ナーガリー文字、ペルシア文字、アラビア文字など複数の文字を学ぶ必要がなくなること、(d) 国民文学の形成に役立つこと、(e) イギリスとインド両民族の相互理解が促進されること。このうち (d) と (e) についてすこし説明を補う必要がある。トレヴェリアンはインドの大衆語はまだ幼年期にあると考える。それをローマ字化すれば、英語からよりすぐれた語彙やそれにとまなう概念を受容することが容易になる。言語のそうした同化（assimilation）によって、イギリス、インド両民族の相互理解がおおいに促進され、そしてインドの大衆語も、来るべきあたらしい国民文学をになうにたる言語へと成長するというのである。また別のローマ字論者はさらに、一種類の文字を使うことによって、国民統合をはじめとしてさまざまな統合が進むとする。

論争は、文字のローマ字化以外に、もうひとつ重要な論点を含んでいた。それは表記法の問題である。当時のインドでは2種類のローマ字表記法が併存していた。ひとつは、言語学者としても著名なジョーンズ（William Jones）が提案したものである。かれは、ローマ字による表記法が一定していないため、アジアにかんする歴史学や地理学が非常に混乱しているとして、母音はイタリア語のように、子音は英語のように記述するという原則を1788年に提唱する。しかしそれ以前に、ギルクリスト（John Gilchrist）という人物が英語的に構成されたローマ字綴りを使い始めており、こちらの方がある程度普及していた。

このような状況のなかで、トレヴェリアンを始めとするローマ字論者たちは、あえてジョーンズのシステムを推奨する。その理由は、英語の狭い世界にとじこもったものではなく、全世界に通用する「普遍的な」システムでなければならない、ということだった。ここで本稿の議論を先取りすれば、アジアの言語をローマ字化するという考え方のみならず、そのローマ字表記法に普遍性を求めるという論点も、やがて舞台を中国に移してふた

たび姿を現すことになる。

さて話を中国に戻すと、*Chinese Repository* 上では、前述のように、ローマ字をめぐるインドの状況が1835年5月にふたたび紹介されたのち、同年8月には、漢字を使うこと、およびそれをローマ字に変えることの是非を周到に論じた無署名の論文が掲載される⁽¹¹⁾。この論文についてはド・フランシスがすでに詳しく紹介しているので⁽¹²⁾、ここでは要点のみを記す。著者はまず、漢字による教育は弊害がおおきいが、アルファベットの表記を導入すれば、その欠点のいくぶんかは除去できるとする。他方、ローマ字化の問題点については、現行の書籍が使用できなくなる、漢字による書き言葉のそれなりの長所が失われる、中国を分裂させる恐れがある、といった点を指摘しつつ、最後の疑念については、「宮廷方言」があらたな書き言葉を形成するだろうという。

これらとは別に、著者が真の困難、唯一の重要性をもつと考える問題は、中国語そのものに同音異義語がおおいために、アルファベットを使うと表現があいまいになりかねない点である。この問題については、編集者が同論文の最後に付した読者からの手紙が、ひとつの答えを提示している。その手紙はまず、「無数の現地住民が、漢字をひとつも知らないままそれ〔言葉〕を身につけている」のであるから、中国語にとって漢字が必須のものではないと指摘する。そして、書かれた言葉はともかくとして、「口語方言はかなり多音節的であると考えざるをえない」と述べ、そうした多音節語を書く場合は「ハイフン」でつなぐべきだと提案する⁽¹³⁾。こうして、同音異義語に由来するあいまいさが非常に軽減されるのである。明示されている訳ではないが、この手紙は、文言と口語とを切りはなし、ローマ字化が向かうべき方向は口語にあることを示唆しているとみてよいだろう。

こうして1830年代の中頃には、インドの状況が紹介されたのち、中国語へのローマ字導入に関する諸問題が検討され、またモリソンが漢字から離れることができなかつたのは異なり、中国語と漢字は切りはなすことができ、さらに、ローマ字化が向かうべき対象は書き言葉ではなく口語にあること、等々が示された。

3 統一表記システム

こののち、1850年前後に廈門や寧波でローマ字化が実践に移されはじめるまでの間に、中国語にかんして *Chinese Repository* 上でもっとも頻繁に登場する話題は、ローマ字表記法の改良、もしくは統一の問題だった。

議論を主導したのは System of Orthography for Chinese words⁽¹⁴⁾ をはじめとする一連の論文 (1836-42) で、無署名だが著者はいずれもウィリアムズ (Samuel Wells Williams) だと考えられている⁽¹⁵⁾。著者の論点は、この最初の論文のなかにほとんど出つくしている。

そこで、この論文を中心にして論旨をまとめてみよう。著者はまず、当時広く使われていたモリソンの表記法を批判する。第一にシステム自体に矛盾があり、未完成であること。つぎに、官話以外の諸地域の方言音を表すのに適当でない部分があること。第三に、ローマ字が英語式の発音で使われているのだが、そもそも英語という言葉は母音の表記が一定せず、他の言語の表記に流用するのは不適當だ、ということである。著者はさらに、モリソン批判にとどまらず、欧米の中国語研究者のあいだに表記法の不統一もしくは混乱があることを問題にする。そして、中国語の諸方言にも一様に使用できるあたらしい表記法を採用するのが望ましいが、このようなことを提起するのは、現在のインドでの試みに非常におおきな影響を受けたためだという。ウィリアムズはそもそも *Chinese Repository* の編集者であるが、インドでローマ字化論を主導した雑誌 *Calcutta Christian Observer* の1835年9月号にも寄稿しており、トレヴェリアンたちのローマ字論を知っていたこと、およびそれを継承しているのは明らかだろう⁽¹⁶⁾。ここではモリソンがいわばギルクリストに相当する。

ここで統一表記システムにたいする批判をすこし紹介しておきたい。1837年3月、*System of Orthography for Chinese words* に対する批判が *Chinese Repository* に掲載された。著者は、「融合をあまりに進めすぎるのは、実際的とは思えない。…それ自体は望ましいことではあるが、それでも、よく適合した表記システムを人類の三分の一が話している言語に提供することの重要性、と比較すれば考慮に値しないような目的のために、真の簡潔さと実用性がいささかも犠牲にされることがあってはならない」という⁽¹⁷⁾。このほか、トームは、だれも自分のシステムを捨てるようなことはしないだろうと、統一には悲観的である⁽¹⁸⁾。また、1843年7月以来、広州で領事館通訳を勤めていたメドウズ (Thomas Taylor Meadows) は、「中国語のような難しい言語を研究する際には、なんであれ他のあらゆる言語を参照することなく、すべてのことが、できる限り扱いやすいようになされなければならない」とする⁽¹⁹⁾。すなわち、*Chinese Repository* 上のさきの批判と同じく、中国語は、その特徴にぴったりとあった独自の表記法を考えねばならない、それだけの重みのある言語だ、とするのである。

1842年1月、*Chinese Repository* に、ウィリアムズの新表記法にもとづく音節表が掲載される⁽²⁰⁾。それは、音節を、声調と有気音の表示は省略して409種に分け、そのすべてについて代表的な漢字を掲げたあと、新表記法、モリソンの表記法、広東語の音声、メドハーストの表記法、新表記法による福建語の音声の横に並べたもので、音節の配列は、新表記法によるアルファベット順になっている。この音節表が示されたことによって、あたらしい表記法がひとまず完成したといえよう。ただし、これをモリソンとくらべてみると、じ

つは全体としてはそれほど大きな変化はない。子音については、声母の g が ng になっているのみである。母音もしくは韻母の部分でとくにはっきりした変更は、〈父〉foo → fú、〈衣〉e → í、〈罪〉tsuy → tsui、〈澳〉aou → au に類するものである。このなかで oo → ú は、まさにギルクリストからジョーンズへの変更そのものである。この新表記法の影響については、筆者は現在までのところ、こののち「ジョーンズ・ウィリアムズ的な表記法」を採用した辞書を10冊ほど確認しているが、実態にかんしてはさらに調査が必要である。

以上、1830年代のなかごろから40年代末にかけて、表記法の改良が企てられたことと、その議論のなかで、英語の音声にとらわれず、かつ普遍志向の表記システムが、中国にも入っていたことを、ここではひとまず確認しておきたい。

II 近代中国語を求めて

1 近代西欧語の成立と口語

こののち、1850年代以降、中国の開港にともなってプロテスタント宣教師が本格的に活動を始めるのにもとない、中国の諸言語をローマ字化しようとする試みが東南沿海地区で本格化し、やがてそれが内陸部や北部の官話地域にも及ぶ。

ローマ字化とは口語を対象とするものなのだが、しかしそれ以前に、布教のための言語として文言をとるべきか口語をとるべきかという、モリソン以来の最重要問題が依然として未解決であった。ここでまず、口語・ローマ字を主張する宣教師たちの論点を見ておこう。当時キリスト教に入信する中国人は、基本的に下層社会の人々であった。したがって、その識字率も非常に低く、どのような手段でキリスト教を伝えるかが、すぐにおおきな問題となった。廈門でローマ字化を唱えていたタルミジ (John Van Nest Talmage) は1850年にすでに、「とくに信者が神の言葉を手に入れ、そして自分自身できちんと読み取ることができるよう方法」について、宣教師たちがずいぶん頭を悩ましていると報告している⁽²¹⁾。かれは、この地区できちんと (intelligently) 本が読める人の率を、男で10人に1人以下とみなし、また女ではごくまれにしかそういう人に出会わない、という⁽²²⁾。

口語論者の主張はつまるところ、宗教的文書は「一般庶民」に理解可能なものでなければならぬ、という点につきる⁽²³⁾。そもそもプロテスタントは聖書 (厳密には新約聖書) のみに信仰のよりどころを求める。そのため、各自で聖書を読むことが非常に大切になる。

大多数の一般人にとって理解不可能な書き言葉が存在している中国の現状を、宣教師たちはしばしば、ラテン語に支配された宗教改革以前のヨーロッパの状況になぞらえた。この点を早い時期に自覚したのが、寧波で1850年以前に自分の説教をすでに口語で準備し

ていたラウリー (Walter Macon Lowrie) である。ラウリーは、1844年の書簡のなかで、「現在のかれらの学問と、それが書かれるスタイルから、私は宗教改革以前のヨーロッパの状態をつよく連想する。そこには学識者が存在し、日常生活の言葉とは違った、普通の人々には理解できない、学習によって得た言葉、を持っていた。…宗教改革ののち、考えること、話すこと、書くことのあたらしい方式が導入され、古いものは消滅している。卑見では、まさに同様の大変革が中国に起こるに違いない」として、布教との関係では、そうした変化が訪れないかぎり、一般庶民のあいだで真理をひろく行き渡らせるのは困難だとする⁽²⁴⁾。上海のクローフォード (Tarleton P. Crawford) はさらに具体的に、「ギリシャ語もラテン語も近代ヨーロッパの意思疎通の媒体にはならなかった。どの場合でも、さまざまな区域の諸方言が前面に出てきた。…いつかこの国で知的な活動が始まるとすれば、それは主として口頭のコミュニケーションを通して始まり、音声表記的な文書によって発展するに違いない。…諸方言のみが生命を持ち、そこから未来の中国が現われるに違いない」といい⁽²⁵⁾、おなじく上海の中国人牧師 Yen Yung-Kiung (顔永京)⁽²⁶⁾ は近代英語を例にあげ、それは、マンデビル (John Mandeville) が旅行記を書き、ウィクリフが聖書を翻訳し、等々で始まり、スペンサー、シェークスピア、ベーコンなどを経てその国の尊敬される言葉になったと紹介したうえで、上海語に英語と同様の地位を求めるのではないと断りつつ、「著名な文人たちによる価値と学識をそなえた書物が上海語で出版されるなら、上海語は一般的で、尊敬され、価値あるものになるだろう」と主張する⁽²⁷⁾。

五港開港以降、実際に中国の奥深くに入り始めた宣教師が直面した現実には、モリソンの時期のような、マカオ、広州、南洋、インドのセランポールなどでほそそと中国語を研究し、文言の文書を準備するしかなかったころとは、根本的に異なっていた。プロテスタントの宣教師たちははじめて庶民大衆をもっとも重視されるべき読者として明確にとらえ始めた。そして、近代西欧語の成立と同じような変革と、それを象徴する著作の出現を中国の言語にも待ち望んだのである。

ただし、このような流れとはべつに、19世紀後半には、中国社会の最上層をめざす動きがしだいに顕著になっていくことも見逃せない。この場合、言語面では文言を用いることになる。文言を主張する宣教師の論点のひとつは、やはりその流通の広さにあった。1851年7月、始まったばかりの廈門や寧波のローマ字化について、「(ローマ字化された)本は、流通がほとんどその出版地の町にとどまるだろう」と、はやくもその流通性を問題にする文章が現われた⁽²⁸⁾。文言論者のもうひとつの論点は文人対策である。1877年に上海で開かれた第1回中国プロテスタント宣教師全国大会でエドキンス (Joseph Edkins) は、布教の最大の敵は文人階層にあり、そのためかれらを納得させる文体が必要だ、と述

べた⁽²⁹⁾。対象をこのような文人階層にしぼって活動を展開することになるのが、1887年に組織された同文書会である。同文書会は1892年には広学会と改称し、その後、変法運動のなかで一定の役割を果たしたことは周知のとおりである。

なお、口語を主張する宣教師は、流通の問題については、じつは古典のスタイルも「読む人は1300万人もおらず、もしマーティン博士の見積りを採れば、600万人にもならない」と反論する⁽³⁰⁾。

2 国語としての官話

当時、以上のような議論と平行して、おもにまず中国東南沿海部でローマ字化が進展していたのだが、近代中国の言語状況についてもっとも注目すべきは、やはり中部・北部地域の官話だろう。本節では、宣教師を中心とする在華西洋人が官話をどのように認識し、どのように扱おうとしていたのかを整理する。

当時は、国語としての標準的な中国語はまだ成立していない。そのようななかですぐにでも中国人と意思疎通をはかろうとする外国人は、自分が学習すべき言葉をそれぞれの判断で選ばなければならなかった。すこし時期は遡るがメドハーストは1832年に、庶民よりむしろ「中国全土で上層階層や政府の役人と親しく交わることになる」人は、官話を勉強するのがよいが、しかし「その交際がおそらくひとつの地域に限られ、…そこに住む庶民の大部分とつきあうことになる」人は、その特定地域の庶民の方言を勉強するのがよいだろう、という⁽³¹⁾。メドハースト自身は最初は官話を学んだが、マレー群島の中国人移民社会ではそれが理解されないことに気づき、福建語の勉強を始めた。一方、広州の領事館通訳だったメドウズは、広東省在住の商人を対象にした言語調査にもとづいて、ビジネスや政府の官吏を目指すものは北京語に専念すべきだとする⁽³²⁾。同様の認識のもとで北京語の教科書『語言自邇集』（1867年）を出版し、ローマ字表記法の面でもおおきな影響をあたえたのがウェイド（Thomas Francis Wade）である。

メドウズやウェイドが、中国の共通語になるのは北京語であると考えていたかどうかは、はっきりしない。それにたいして、きわめて早い例としてはさきに紹介した「宮廷方言」云々（1835年）があるが、つづいて、*Chinese Repository*、*Chinese Recorder* 上で早いものとしては、ヘルム（B. Helm）が1877年につぎのような意見を提出している。すなわち、かつてルターのドイツ語訳聖書によって高ドイツ語が標準語となったように、そのような位置を「官話も中国で徐々に占めるように目指すべきではないだろうか」としたうえで、もしさまざまなミッションがひとつの方言を使うことに同意すれば、ひとつの本をおおくの地区で使うことができ、これは印刷費用の節約にもなる、と述べる。そしてさらに、「しかし官話の

利点を十分に引き出すには、それをローマ字化する必要があるだろう」という。ただし著者は、「このことはすくなくとも中央と北部中国では実行可能である」と断っており、必ずしも中国全土の共通語として官話を考えていたのではない⁽³³⁾。南京の宣教師リーマン (Charles Leaman) は、布教に限ってのことであるが、官話は中国のすくなくとも三分の二が使っている言葉であり、あらゆる場面で現在の書物に取って代ることができ、官話のみが教会学校で使うべき言語であるとした⁽³⁴⁾。さらに、「もし今日、中国に国語があるとすれば、それは銜学者の半分死んだ文理ではなく、官吏と人々がともに〈官話〉として知っているものである」と、より一般化された意見が出される⁽³⁵⁾。

ただし、中国のキリスト教界では、こうした議論とはべつに、もうすこし具体的な実践の場面で、実は19世紀の終わりごろまでには布教の言語が事実上確定しようとしていた。それは、聖書の発行部数の上にはっきりと現われた。官話漢字版(約55万5000部)が文言版(古典と浅文理)(約38万2000部)を大きく上回っていたのである(1894年度。部分訳も含む)⁽³⁶⁾。官話は、発音はともかくとして語彙の面ではきわめて統一されており⁽³⁷⁾、地域差の問題はほとんど生じない。なおこのとき、官話以外の漢字口語版は約4万7000部、ローマ字口語版は6700部だった。

3 官話標準システムへの模索

それでは、こうした官話をどのようにローマ字化しようとしたのだろうか。さきにあげたリーマンは1887年に、漢字では電信が使えないことを指摘するなかで、中国の文明化や伝道にとって官話のローマ字化が必要なことを論じたが⁽³⁸⁾、これにたいして、すぐに反論が出された。「現在、非常によく知られていることだが、官話の発音の普遍的な形態は、〈宮廷方言〉でさえ存在していない」、官話には「統一された発音、つまりローマ字化の基礎がない」、と⁽³⁹⁾。これについては、すぐに別の宣教師が、すこし改変をほどこした南京語は、さまざまな地域の人によく通じると、再反論を提出した⁽⁴⁰⁾。結局、そののちの大勢として宣教師たちは、特定地域に限定することなく、官話全体の統一な表記システムを作る方向に進んだ。

システム作りは、つぎのような経緯をたどった。まず、1877年の第1回中国プロテスタント宣教師全国大会のとき、「中国語音をローマ字で表記するための統一システム」を検討するための委員会が設置された⁽⁴¹⁾。その後、作業はほとんど進展しなかったが、統一の進め方についてはティモシー＝リチャード (Timothy Richard) が課題を整理している。かれは、新しい表記システムを考えるとまずはひとつの標準的な言語に固定することが必要で、これが官話であることに疑問の余地はないとする。ただし南北両官話の中間的な

ものを採用すべきであり、「トマス＝ウェイドのような地域限定的なものではなく、モリソン、ウィリアムズ、マティーア、バラーのような、もっと一般的な音声表記法が必要だ」という⁽⁴²⁾。

ウェイドの表記システムは北京語に特化しており、その点が画期的であったと同時に、そのために批判をあびることになった。福州イギリス領事のプレイフェア (G. M. H. Playfair) は、「トマス＝ウェイド卿のローマ字システムは、しかしながら、しばしば、一般的な目的には向かないと断言されている」といい⁽⁴³⁾、またマティーア (Calvin W. Mateer) は、ウェイドのシステムは「それ自体に一貫性がなく、北京語と他の諸方言との関連をまったく無視し、あたかも北京語以外の方言への適用を排除しようとして構成されたかのようだ」という⁽⁴⁴⁾。プロテスタント宣教師たちが目指したのは、こうしたウェイドとは対照的な、諸官話全体を包括できるような表記システムだった。またそこには、やはりウェイドとは対照的な、中国人自身が使うことを目指すというもうひとつの目的があった。

1899年、中華教育会 (The Educational Association of China) の第3回会議で、統一表記システム策定のための委員会が設置され、ようやくシステム作りが本格化する⁽⁴⁵⁾。その作業はつぎのような手順で進められた⁽⁴⁶⁾。①ローマ字の各文字の音価を決定し、諸官話のすべての音を表記できるシステムを構築する。②そのシステムによる「比較音声表」を作成する。これは約3千の漢字を選び、そのすべてに北京、南京その他の地方の発音を付すものである。③「比較音声表」から音声の変化の規則を導き出し、それぞれの漢字について「標準綴り (standard spelling)」を試験的に確定し、「標準音声表」を作成する。④「標準音声表」にもとづいて、音節表、入門書、福音書の一部を印刷し、意見を求める。

まもなく、標準システムがひとまず完成したのち、1903年に、江西省の牯嶺 (廬山) で、南京から成都までの長江上流域地区の会議が開かれ、同システムにかんして「概して満足できるもので、いくつか変更を加えるだけで揚子江流域の大部分に適用可能である」との意見を全会一致で採択した⁽⁴⁷⁾。そして1905年4月までには、山東の登州大学や、南京の金陵大学にも導入され⁽⁴⁸⁾、システムの解説書、入門書、「マタイによる福音書」、「マルコによる福音書」の試訳、8頁の月刊誌 *Pu Tung Wen Bao* (普通文報) が現われた⁽⁴⁹⁾。

完成した「比較音声表」から例として〈鞋〉を取り出してみると、以下のようになる⁽⁵⁰⁾。

標準綴り	北京	南京	漢口	九江	山東東部	山東中央	四川	陝西	山西
Hsiai	Hsie	Hsiai	Hai	Hsiai	Hiei	Hiei	Hai	Hsiai	Hsiai, Hai

標準綴り (standard spelling) として、北京語の音声とは異なる Hsiai が導きだされている。一方、北京語では同音の〈歇〉に対しては Hsieh が割り振られた。実際に使うときは、ここにさらに声調符号 (入声を含む) がつけられる。

この標準システム (standard system) で使われている表記法の最大の特徴は、有気音を示す符号を取り除いてしまい、有気・無気の区別を現在の拼音方式と同様の b - p, d - t, g - k 等にしたことである。その他の点を、「標準綴り」ではなく、「標準システム」方式で表記された北京語を使ってウェイド式とくらべてみると、声母にかんしては、上記の区別のために拼音で j と zh に相当するものが ch (ウェイド式) → dj (標準システム) に、また z が ts, tz → dz に変わっている。韻母部分でもっとも注目される変更は、u で始まる二重母音を ua → wa, uai → wai、…のようにした点である (例外あり)。このような場合に w を使用するの、古くはマーシュマン (Marshman) が指摘しているように英語の話者に配慮した綴りであり、それ以前のカトリックの宣教師たちとは異なるものである⁽⁵¹⁾。それにたいして、マーシュマンやモリソンは w を取り入れ、ウィリアムズもこれを継承してしまっている。ここで逆に注目されるのは、むしろウェイドが w を採用しなかったことであろう。まとめてみると、標準システムは諸官話に広く適用できる表記法を目指した点でインドのローマ字論者に通じるが、具体的な綴りの方式では、北京語のみを表記しようとしたウェイドの方が、むしろ英語以外のヨーロッパの諸言語にも開かれた母音の使い方をしているといえる⁽⁵²⁾。

さて、標準システムの「標準綴り」は、その個々の音声はどこかの地方に存在するかもしれないが、こうしてできあがる「標準綴り」全体についていえば、そのような音声の体系を備えた官話は、どこにも実在しないだろう。その点で、これは仮想のものである⁽⁵³⁾。1907年、標準システムについてマーティン (William Martin) は、「すべての人を満足させることはできず、私を満足させることもできない。しかし、妥協することは協同の代償である」として、システムに不満をもらしつつも、やはり普遍的な適用可能性の側に重点をおいて評価している⁽⁵⁴⁾。なぜウェイドのように北京語に特化してはならず、さまざまな地域の音声にたいして普遍性をもった表記システムでなければならなかったのか。この点を明確に説明した文章は見当たらないが、すくなくとも宣教師の場合、その理由は容易に想像がつく。そもそも宣教師が口語のローマ字化を考えたのは、よりおおくの人に神の言葉を届けるためだった。諸官話の音声上の違いは、東南部の方言ほどではない。統一された言語が必要だという前提のもとで、諸官話にゆるやかに網を掛けるように表記システムを作り上げれば、そのローマ字は、北京語などに限定する場合より、もっと広範囲に理解されるものになる、と考えたのだろう。ウェイドが通訳官という職務のために北京語を選

んだのと同様に、宣教師もその任務上、北京語のみを選ぶわけにはいかなかったのである。これが、民国以前における在華宣教師の、文字改革をめぐるひとつの到達点であった。

Ⅲ 民国期

1 中国人による文字案の台頭

こうしてひとまず完成した官話標準システムは、1908年には、「急速に全中国で取りあげられている」、そして入門書は中華教育会で昨年もっとも売れた本になった、と報告されたが⁽⁵⁵⁾、これを最後に、ローマ字をはじめとする文字改革関係の記事は、点字にかんするものを除いて *Chinese Recorder* からほとんど姿を消す。それがふたたび現われるようになるのは、1916年のことである。その後の記事から推測すると、官話標準システムは順調には普及しなかったようである。おそらく、そのうえに清末民初の混乱が重なり、このような数年間の空白が生じたのだろう。

1916年に *Chinese Recorder* 上で文字改革の議論を再燃させたのは、官話標準システムではなく、王照の官話字母だった⁽⁵⁶⁾。王照は、進士となったのち郷里に小学校を設けて教育に携わり、戊戌政変の際には日本に亡命した人物である⁽⁵⁷⁾。そののち、1900年に『官話合声字母』を出版した。王の官話字母は、中国の伝統的な反切の原理に基づいて、基本的な音声を声母と音母に分解してそれぞれに記号を定め、その2種類の記号の組み合わせでひとつの音声を表示するものである。記号は漢字の一部を取り出して作っているため、日本語のカタカナに似たものもある。中国人自身による文字改革案は、このように清末から現われはじめるのだが、その最初は、盧戇章の『一目了然初階』（1892年）だとされる。廈門語を表記するためのもので、ローマ字と、それをすこし変形させた文字を使った。やはり反切の原理にもとづく。盧戇章は、*Chinese Recorder* でも簡単に紹介されたが、注目されることはなかった。

中国語の音声は声母と音母の組み合わせからなっており、盧戇章や王照のシステムはその特性を生かしたものだ。また王照が作り出した記号は、縦書きをすることができ、その形は筆と墨という筆記用具にもなじむものである。ローマ字を筆で横書きすることに比べれば、その書きやすさは容易に想像がつく。ただし、反切の原理と書きやすさという2点を踏まえた文字案は、西洋人がはやくに発表していた。クローフォードの『上海土音字写法』（1855年）である。しかし、1888年にクローフォード自身がこのシステムを *Chinese Recorder* 上であらためて紹介したが⁽⁵⁸⁾、反響はなかった。

これらにたいして王照のシステムは、*Chinese Recorder* 上で紹介された翌1917年の夏に

は、宣教師百人が河南の鶏公山に集まって勉強会を開き⁽⁵⁹⁾、年末までには山東のパプティストの代表が同システムを採用することに賛成し、ローマ字論の強かった福州でも導入され、四川の委員会も四川方言に適応させた文書を準備し、また漢口方言に合わせた改変もなされ、さらに直隸ではこのシステムで作られた本がすでに9000冊売れているという⁽⁶⁰⁾。最後の直隸省の例は、おもに教会外のことを指していると思われる。王照は北京を中心に活動し、1905年にはその官話字母が大流行するまでになっていた⁽⁶¹⁾。

一方、1917年12月には、廈門長老教会大会（synod）が、翌18年の年末までに廈門地区の教会関係者全員が方言版聖書を読めるようにするという、野心的な計画を採択し、それはローマ字システムによるものとされた⁽⁶²⁾。またメソジスト監督教会福州大会も同様の計画を進めていた⁽⁶³⁾。ところが、翌1918年は教育部が注音字母を公布する年である。こうして同年までに、「3つのシステムがとくに注目され、急速に使われるようになっていく。政府による簡略化中国語システムである注音字母、王照が考案しパイル博士が改変した官話字母、そしてローマ字化である」という事態が出現していた⁽⁶⁴⁾。パイル（Peill）は王照のシステムを、北方官話に近い各種方言にも適用できるように改変していた⁽⁶⁵⁾。またここでいう「ローマ字化」とは、廈門、汕頭、寧波などのローマ字方言を指している。

つまりこの段階で、宣教師たちがかつてあれほど苦労して作り上げた官話標準システムは、もはや論外とされてしまった。それにかわって、官話字母と注音字母という中国人の考案したシステムが浮上し、宣教師たちにとって中国語の表記法の問題は、こうして1918年までに再び混乱に陥っていた。その後、中国語の表記法をめぐる動きは、1920年代を通して、統一への志向と拡散とをさらに繰り返す。

まず、1918年4月に開かれた The China Continuation Committee（中華続行委弁会）の第6回年次大会で、表記法の問題を検討するための特別委員会が組織され、9月24、25日に上海で会合をもった同委員会は、注音字母の採用を全会一致で決めた⁽⁶⁶⁾。ロンドン宣教会の北部中国地区委員会は、7月以前にすでにメンバーにこのシステムを推奨していたが⁽⁶⁷⁾、1919年に入ると、YMCA や YWCA の総会、宣教師の夏の集会などで教授されたほか、日曜学校連合（Sunday School Union）や各種聖書協会も同システムを推進し⁽⁶⁸⁾、上海や蘇州などの宣教師が呉語にも適用することを推奨し、山東のイングリッシュ・パプティスト・ミッションでは、地方の学校や大人のための夜学で使うことを決め⁽⁶⁹⁾、武漢でもキャンペーンが行われるなど⁽⁷⁰⁾、注音字母に向けた動きがキリスト教界で加速する。

さらに1920年には、「昨年もっとも重要だった前進は注音字母の普及である」とされ⁽⁷¹⁾、一貫してローマ字システムを使ってきた福建でさえ、同年夏には、福建キリスト教教育会の年次総会で、ローマ字がうまくいっているところではローマ字を継続し、新しい表音シ

ステムが容易なところではそれを福州方言に導入することを承認した⁽⁷²⁾。

2 教会の中国化と大衆教育

1922年5月、上海で National Christian Conference（キリスト教全国大会）が開催された。これは、1877年以来続いてきた The General Conference of the Protestant Missionaries of China（中国プロテスタント宣教師全国大会）の第5回大会に相当するが、この年から名称が変更され、宣教師ではなく、「中国における中国人プロテスタントの最初の真の代表者会議」となった大会である⁽⁷³⁾。この大会で、「政府によって採用された39のシンボルによる表音システムは驚くほど急速に広がっている」と報告される一方で⁽⁷⁴⁾、晏陽初を議長とする識字にかんする分科会が開かれ、この年の3月から長沙で行われていた晏の識字教育が紹介された。それは、最初の1か月は注音字母を勉強し、それを使いながらあとの4か月は基本漢字を学ぶ、というものだった⁽⁷⁵⁾。この教育の特徴は、学習の基本はあくまでも漢字にあり、注音字母はその漢字の発音を学ぶための補助、という点にある。表音文字で識字教育を進めようとしていたそれまでのキリスト教関係者の主流とは異なる、あらたな方法の出現である。

識字教育を中心にすえた平民教育運動は、1922年から25年にかけて最高潮に達した。その実態については小林善文の研究に詳しいが⁽⁷⁶⁾、*Chinese Recorder* 上でも、1924年には、注音字母の重要性がたえず増しているとされながらも⁽⁷⁷⁾、張作霖が、平民教育の方法で軍隊に「千字」を教えるために晏陽初らを奉天に招き⁽⁷⁸⁾、天津では平民教育運動の大規模なパレードが行われて、約10万人が参加したことなどが伝えられている⁽⁷⁹⁾。そして11月には、「最近、注音字母は死んだとさかんに言われている」⁽⁸⁰⁾、1926年1月には、平民教育運動にかんして、「この仕事のためのすぐれた道具はYMCAが用意した千字シリーズである。…中国のほとんどの分野で注音字母運動は衰えているようだ」、と言われるにいたる⁽⁸¹⁾。

こののち、文字改革や識字教育をめぐるのは、30年代以降、大衆語論争やラテン化運動などが展開することになるが、キリスト教界が1918年に注音字母を受け入れ、さらに22年に平民教育運動が登場した段階で、西洋の宣教師主導の文字改革および識字教育はほぼ完全に終息したと考えてよいだろう。

最後に、文字改革や識字教育が中国人の手でどのように展開されたのかを整理して、本稿をしめくくることにしたい。平民教育運動には、じつは微妙な問題が存在している。平民教育の最初の実験は、1922年3月から7月まで長沙で行われたが、その最中の5月に開かれたキリスト教全国大会で、さきに述べたように晏陽初が自身の教育実験を紹介した。

その分科会の冒頭、中国独自の中国教会をつくる夢を語るなかで、彼はこのようにいう。

「〔しかし〕…悪魔がわれわれを待ち受けています。…悪魔とは何か。それは読み書きのできないことです。…この悪魔を教会から追い出さないかぎり、けっして固有の中国教会を望むことはできません。それは不可能です。…無知な教会はけっして力強い教会ではありえません。すべての力の源である聖書を読むことのできない教会、そのような教会はけっして力強い教会ではありえません。…今日の午後、中国の教会が聖書を読む教会になる道筋と手段とを議論しに、わたしたちはここに集まっています」⁽⁸²⁾。

いうまでもなく晏陽初はクリスチャンであり、その平民教育運動もキリスト教会、なかでもYMCAの援助なしでは考えられないものだった。そして晏陽初はここで、「聖書を読む教会」について語り、そのなかに自らの識字教育を位置づけている。「聖書を読む教会」とは、清末以来の宣教師の文字改革の目的となんら変わるところがない。一方で、晏陽初のこの発言は矛盾をはらんでいる。なぜなら、宣教師たちが「信者」を教育対象としたのにたいして、晏陽初の実験は当初から中国の一般大衆に向かっているからである。1924年度の*The China Mission Year Book*に寄せた「平民教育運動」という一文で、彼はあらためてこのように述べる。「『中国の何百万もの文字の読めない人々を、文字を読む、知的な国民にすること』が、平民教育運動の基本的な目的である」⁽⁸³⁾。この段階で、晏は自分の任務をはっきり意識し、明確にキリスト教界の枠を超えているといえよう。

ただし、こうした「逸脱」は、キリスト教界内ではやくから胎動していた。19世紀末から20世紀初頭にかけて、中国の教会に新しい動きがふたつ起る。ひとつは教会の中国人化、いわゆる本色教会化であり、もうひとつは欧米の「社会福音」の影響を受けた社会服務（social service）の発生である。ここでとくに注目されるのは社会服務であるが、それは、病院や学校を建設して信者以外の人々をも受け入れる、といった従来からのミッションの活動を超えるものだった。たとえば、「牧師の使命は福音を説き、個人の魂を救済することであり、…。〔しかし〕近年、教会の別の考え方が生じており、…すわなち、いわゆる社会事業教会である。この教会の目標は地域社会の活動全般の社会センターになること、あらゆる階層の人々の必要に応えることである」といった意見が出てくる⁽⁸⁴⁾。こうした社会服務事業をもっとも活発に展開したのが、中国人青年を主体とするYMCAである。そしてYMCAの活動は1921年に頂点を迎えるとされるが⁽⁸⁵⁾、その背景に五四運動があったことはいうまでもない。YMCAは中国人化がとくに強く推進されていた団体である。

つまり、五四運動の愛国心を共有した青年信者が、中国社会そのものに向かおうとしたのだと考えられる。

中国社会全般と接点を持つとしようとした方向が、文字改革上にも現われる。1918年9月に中華統行委弁会の特別委員会がどのような経緯で注音字母の採用を決めたのかは不明だが、それに先立つ8月に、「何であれ最終的に受け入れられるシステムは、中国人の文化的好みに適合し、中国政府と広範な人々の協力が得られるものでなければならない」という意見があり⁽⁸⁶⁾、またその後、注音字母推進の中心になるガーランド (S. J. Garland) も、「このシステムは完全に中国由来で、政府の教育部に支持され、理論的には完全かもしれないが西洋人の産物であるどのシステムよりも、中国の識字者と非識字者に訴えかけることだろう」と述べる⁽⁸⁷⁾。王照の官話合成字母をキリスト教会が一時支持したのも、おそらく同様の理由によるのだろう。つまり、できるだけ中国の社会と接点を持ち、キリスト教界の枠を超えて活動を社会化していこうとする動きの一環である。

おわりに

1830年代の中頃、モリソンの死後、ローマ字中国語の課題が在華西洋人の視野に入ってくるが、それは直接的にはインドの影響を受けたものだった。その影響にはふたつの側面があった。ひとつは、非ヨーロッパ言語のローマ字化という考え方そのもの。もうひとつは、普遍的表記システムの導入である。さらに、それらの背後には、(宣教師の場合は信者に限られるとはいえ) 大衆に書き言葉を提供するという共通した使命感があった。インドのローマ字論に学んだウィリアムズは、1840年代までに、中国諸語のための統一表記システムを作り上げる。中国ではその後、1850年以降にまず東南沿海地区で口語のローマ字化が本格化する。19世紀の後半は同時に、布教のための言語として文言と口語のどちらをとるべきかという議論が先鋭化してゆく時期でもあった。このなかで、宣教師はしばしば中国の言語状況を宗教改革以前の、ラテン語に支配されたヨーロッパになぞらえ、諸方言のみが生命を持つとする意見も現れるが、文言のもつ流通性と文人の影響力を重視する文言論者の流れも小さくはなく、広学会の成立のなかでひとつの頂点を迎える。

宗教文書は一般庶民に理解可能なものであるべきだとする口語論者は、そのひとつの結論として、官話ローマ字化標準表記システムにたどりつく。これは、「官話」をもっとも広範囲に意志疎通が可能となる言語として捉え、その標準音声を確認しようとする作業でもあった。このシステムは、普遍的な適用性という考え方を継承しており、いわばトレヴェリアンの理想を中国の官話地域で実践に移そうとしたものである。ただし最終的に確定さ

れた「標準綴り」全体は、現実にはどこにも存在しない音声体系となった。

その計画が本格化したのは1899年のことである。ところがその7年前にはすでに盧懋章の『一目了然初階』が出版され、文字改革という、一国の文化の根幹にかかわる作業に中国人自身が参入し始めていた。こうしたときに、宣教師たちのローマ字への努力がひとつの頂点に達するのだが、その後、それがさかんに使われた形跡はない。また中国語のローマ字表記法としてはウェイド・ジャイルズ式が主流となってゆく⁽⁸⁸⁾。

民国期に入ると、少なくとも官話地域では、官話字母や注音字母など、中国人が考案し、また中国政府と協力できるような表記システムを教会も受け入れるようになる。さらに平民教育運動にいたっては、その推進者がキリスト教と深い関係を持っていたにもかかわらず、キリスト教という枠を踏み越え、中国社会そのものに向かって活動を展開した。「個人の魂の救済」を目的とするそれまでの教会⁽⁸⁹⁾のなかに新たに登場した「社会服務」の潮流が、五四時期に向かって高まりをみせる民族主義、愛国主義と合流しつつあったのだろう。宣教師の考案した西洋色の濃いローマ字案が、少なくとも識字の道具としてはまったく顧みられなくなっていく最大の要因がここにある。すなわち、この時期における文字改革をめぐる教会の動向には、教会自体の変化と中国社会の変化の両面において、中国の近代史そのものが深く刻印されていると思われる。

なお、辛亥革命期から五四時期にかけての「社会服務」の理念と実態については、稿をあらためて検討してみたい。

註

- (1) 村田雄二郎「五四時期の国語統一論争——「白話」から「国語」へ」『転形期における中国の知識人』汲古書院、1999年、7頁。
- (2) John De Francis, A Missionary Contribution to Chinese Nationalism, *Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society* 73, 1948. *Nationalism and Language Reform in China*, Princeton University Press, 1950.
- (3) 倪海曙『中国拼音文字運動史簡編』時代出版社、1950年、23-29頁。
- (4) Literary notices: 1, *Chinese Repository* 3(8), 1834, p386. "To convey the Chinese spoken language without the character is not impracticable, though it is difficult and often embarrassing to the learner."
- (5) Robert Morrison, *Chinese Miscellany: consisting of original extracts from Chinese authors, in the native character, with translations and philological remarks*, McDowall, 1825, p. 3.
- (6) John De Francis, *Nationalism and Language Reform in China*, p. 18.
- (7) W. H. Medhurst, *China; Its State and Prospects*, Crocker & Brewster, 1838, p. 144. "The number of individuals acquainted with letters in China, is amazing great. One half of the male population are able to read;..."

- (8) Elijah Coleman Bridgman, *The Life and Labors of Elijah Coleman Bridgman*, Anson D. F. Randolph, 1864, p. 59. “[T]he Chinese are a bookish people.” David Abeel, *Journal of a Residence in China*, J. Abeel Williamson, 1836, p. 146. “[T]he Chinese are a reading people.”
- (9) Literary notices: 1, *Chinese Repository* 3(8), 1834, p386. “Of the correctness of these opinions we have not the shadow of a doubt; nor should we be surprised, were it to be announced in the course of a few years, that ‘the written character of the celestial empire is giving place to the Roman.’”
- (10) 以下の記述は蒲豊彦「19世紀インドのローマ字論争」『東洋学報』88(4)、2007年にもとづく。
- (11) An alphabetic language for the Chinese, *Chinese Repository* 4(4), 1835, pp. 167–172.
- (12) John De Francis, *Nationalism and Language Reform in China*, pp. 19–20.
- (13) “[H]undreds and thousands of natives do acquire it without the knowledge of a single character.” “Whatever may be the monosyllabic character of the written, we cannot but think that the oral dialect may fairly lay a considerable claim to a polysyllabic character;”
- (14) *Chinese Repository* 5(1), 1836, pp. 22–30.
- (15) 洪惟仁『閩南語經典辭書彙編3福建方言辭典』武陵出版有限公司、1993年、23頁。
- (16) その後出版された中国語関係の各種辞書を見ても、ジョーンズのシステムをもっとも積極的に取り入れようとしているのは、ウィリアムズである。
- (17) Orthography of Chinese language. *Chinese Repository* 5(11), 1837, pp. 481–485. “[B]ut it does not seem practicable to carry the assimilation very far. ... [N]othing of real simplicity and utility should be sacrificed to an object, which, though desirable in itself, yet is not worthy of a thought, when compared with the importance of providing a well-adapted system of orthography for the language spoken by a third of the human family.”
- (18) Robert Thom, *Esop's Fables written in Chinese by the learned Mun Mooy Seen-shang, and compiled in their present form by his pupil Sloth*, The Canton Press Office, 1840, xviii.
- (19) Thomas Taylor Meadows, *Desultory Notes on the Government and People of China*, W. H. Allen and co., 1847, (reprint, 1970), p. 49. “[I]n the study of such a difficult language as the Chinese, every thing ought to be made as convenient as possible, without reference to any other language whatever.”
- (20) Samuel Wells Williams, New orthography adopted for representing the sounds of Chinese characters, by the Roman alphabet, in the national language and in the dialects of Canton and Fukien, *Chinese Repository* 11(1), 1842, pp. 28–44.
- (21) John Gerardus Fagg, *Forty Years in South China, The Life of Rev. John Van Nest Talmage, D.D.*, Anson D. F. Randolph & Co., 1894, p. 106. “The question whether there is any way by which this people can be made a reading people, especially by which Christians may be in possession of the Word of God, and be able to read it intelligently for themselves, has occupied much thought of the missionaries here.”
- (22) John Van Nest Talmage, Letter, December 17, 1850, *The Missionary Herald* 47(5), 1851, p. 153.
- (23) たとえば、*Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China : held at Shanghai, May, 10-24, 1877*, Presbyterian Mission Press, 1878, (reprint, 1970), p. 215.
- (24) Walter Macon Lowrie, *Memoirs of the Rev. Walter M. Lowrie, Missionary to China*, Presbyterian

- Board of Publication, 1854?, p. 226, 323. “Their literature at present, and the style in which it is written, reminds me very much of the state of Europe before the Reformation. There were learned men then, and they had a learned language, different from that of every-day life, which common people did not understand. ... A new mode of thinking and speaking, and writing was introduced after the Reformation, and the old has disappeared. Very much the same revolution, in my humble judgment, must occur in China.”
- (25) Tarleton P. Crawford, A System of Phonetic Symbols for writing the Dialects of China, *Chinese Recorder* 19(3), 1888, p. 102. “Neither Greek nor Latin became the medium of communication in modern Europe. In every case the dialects of the various sections come to the front, ... To my thought, if ever intellectual activity begins in this land it must begin largely through oral communication, and be developed by a phonetic literature. ... Only the dialects have life, and out of them must come future China.”
- (26) 顔永京（1838-1898）は14歳でアメリカに渡って学び、1862年に帰国。聖約翰大学の設立にかかわった。欧米の心理学書の翻訳者としても知られる。A *Dictionary of Asian Christianity*, William B. Eerdmans Publishing Company, 2001, p. 916 参照。顔永京については高嶋航氏の教示を受けた。
- (27) Y. K. Yen, The Shanghai Vernacular, *Chinese Recorder* 23(8), 1892, p. 388. “[T]hat if books of value and learning by well-known scholars could be published in it, it would be popular and respected and valued.”
- (28) Bibliographical notices, *Chinese Repository* 20(7), 1851, p. 476. “[W]e fear the circulation of the book will be restricted almost to the city where it is published.” なお、*Chinese Repository* 卷末の索引によれば本記事の著者はウィリアムズだと思われる。かれはこのなかでさらに、15年ほど前の、インドでのトレヴェリアンの試みはまったく失敗に終わっており、中国人も同様に自分たちの文字に固執するのではないかと述べ、この時点までには中国語のローマ字化に懐疑的になっていたようである。
- (29) *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China: held at Shanghai, May, 10-24, 1877*, p. 220.
- (30) John C. Gibson, *Learning to Read in South China*. Hazell, Watson, and Viney, Ltd., 1888, p. 9. “[T] here are not thirteen millions of readers, or if we take the estimate of Dr. Martin, not six millions.”
- (31) W. H. Medhurst, *A Dictionary of the Hok-keen Dialect of the Chinese Language, according to the reading and colloquial idioms ...*, The Honorable East India Company’s Press, 1832, vi. “A person who contemplates learning the Chinese language, without much prospect of verbal intercourse with the people, or who will be generally conversant with the higher class and Government officers, throughout all the Provinces, would certainly do well to study the Mandarin dialect; -but he whose intercourse will probably be confined to one district, and who will have to do with the great mass of the people residing in it, would to better to study the vulgar dialect of that particular place.”
- (32) Thomas Taylor Meadows, *Desultory Notes on the Government and People of China*, pp. 45-46.
- (33) B. Helm, The Mandarin dialect for Christian Literature, *Chinese Recorder* 8(2), 1877, pp. 164-165. “Should we not then aim to make Mandarin gradually take the place in China that high

German has in that country. ... If the various missions could agree to use one dialect (and this is practicable in central and northern China at least), then one book would do far a denomination over many provinces. ... But to secure the full advantage of Mandarin it would have to be romanized; ...”

- (34) C. Leaman, *The Book Language*, *Chinese Recorder* 11(1), 1880, pp. 103-119.
- (35) Jonathan Lees, Letter to a Friend on Wen-li v. Vernacular, *Chinese Recorder*, 23(4), 1892, p. 178. “[I]f China has a national language to-day, it is not the half-dead Wên-li of its literary pedants, but that which officials and people alike know as the ‘Kuan-hwa’.”
- (36) J. A. Silsby, The spread of vernacular literature, *Chinese Recorder* 26(11), 1895, p. 509.
- (37) A. Sydenstricker, Romanizing the Official Dialect, *Chinese Recorder* 19(1), 1888, p. 37.
- (38) Charles Leaman, Telegraphy in China, *Chinese Recorder* 18(11), 1887, pp. 409-413.
- (39) A. Sydenstricker, Romanizing the Official Dialect, *Chinese Recorder* 19(1), 1888, p. 37. “Now it is very well known that there is no form of pronunciation of Mandarin that is universal – not even of the ‘court dialect.’ ... [T]here is no uniform pronunciation – the basis of romanization.”
- (40) A. Purist, Romanizing the Official Dialect, *Chinese Recorder* 19(3), 1888, p. 135.
- (41) *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China: held at Shanghai, May, 10-24, 1877*, p. 17.
- (42) Timothy Richard, Non-Phonetic and Phonetic Systems of Writing Chinese, *Chinese Recorder* 29(11), 1898, p. 545. “Have one method of phonetics which shall not be so local as those of Sir Thomas Wade, but more general like those of Dr. Morrison, Dr. Williams, Dr. Mateer and Mr. Baller.”
- (43) Playfair, *The Cities and Towns of China: A Geographical Dictionary*, The Kyoyeki Shosha, 1897?, vi. “Sir Thomas Wade’s system of romanization has, however, so often been declared unsuitable for general purposes, ...”
- (44) C. W. Mateer, *A Short Course of Primary Lessons in Mandarin*, American Presbyterian Mission Press, 1911, xv. “The most popular system, that of Sir Thomas Wade, is inconsistent with itself, quite ignores the relationship of Pekingnese to other dialects, and seems to be constructed as if to preclude its application to any dialect except the Pekingese. The most notable characteristic of the system is its want of system.”
- (45) 1877年に設置された委員会との継承関係は不明である。共通して参加している委員もない。Notes, *Chinese Recorder* 32(8), 1901, p. 410 を参照のこと。中華教育会は、プロテスタント諸ミッションが連合して組織したものである。
- (46) Notes, *Chinese Recorder* 34(3), 1903, p. 144. Mandarin Romanization, *Chinese Recorder* 34(7), 1903, p. 347-349.
- (47) F. E. Meigs, Romanization Meeting at Kuling, *Chinese Recorder* 34(10), 1903, p. 528. “[T]he system prepared by the committee is, on the whole, satisfactory, and with a few changes ... can be adapted to the greater part of the Yang-tse valley districts.”
- (48) The Mandarin Romanized, *Chinese Recorder* 35(1), 1904, p. 38. Standard Mandarin Romanized, *Chinese Recorder* 36(4), 1905, p. 197.
- (49) Romanized Mandarin, *Chinese Recorder* 36(3), 1905, p. 144.
- (50) *The Standard System of Mandarin Romanization*, Vol.1, American Presbyterian Mission Press,

- 1904, p. 20. 本書は関西大学の内田恵市教授所蔵のものを使用させていただいた。
- (51) J. Marshman, *Elements of Chinese Grammar*, The Mission Press, 1814, p. 100.
- (52) ウェイドの綴りのこの特徴は、すでにカールグレンが詳しく論じている。Karlgrén 著、岩村忍・魚返善雄訳『支那言語学概論』文求堂、1940年（原著1928年）、（1999年ゆまに書房復刻）、315-320頁。
- (53) なお、「標準綴り」を使ったローマ字文を実際にどのように使用するかについては、筆者はまだ「入門書」等を入手しておらず、よく分からない。たとえば、文中に Hsiai という綴りが現れた場合、北京語の話者は、「これは Hsie のことである」という知識をあらかじめ持っていないといけないのか、といった疑問がある。
- (54) W. A. P. Martin, A Plea for Romanization, *Chinese Recorder* 38(9), 1907, p. 502. “It cannot satisfy all, it does not satisfy me, but compromise is the price of co-operation.”
- (55) Our Book Table, *Chinese Recorder* 39(1), 1908, p. 44. “The ‘Standard’ system of Romanization is rapidly being taken up all over China.”
- (56) E. J. and S. G. Peill, The Scriptures in Phonetic for North China, *Chinese Recorder* 47(5), 1916, pp. 329-338.
- (57) 倉石武二郎『漢字の運命』岩波書店、1952年、48-49頁。
- (58) T. P. Crawford, A system of phonetic symbols for writing the dialects of china, *Chinese Recorder* 19(3), 1888, pp. 101-110.
- (59) Progress in the Use of a Chinese Phonetic System, *Chinese Recorder* 47(11), 1917, p. 743.
- (60) Chinese Phonetics, *Chinese Recorder* 47(12), 1917, pp. 811-812.
- (61) 武田雅哉『蒼頡たちの宴』ちくま学芸文庫、1998年、272頁。
- (62) R. A. Rogers, A Campaign against Illiteracy, *Chinese Recorder* 49(5), 1918, p. 342.
- (63) Recommendations and Findings of Church and Missionary Organizations, *The China Mission Year Book 1918*, p. 143.
- (64) Illiteracy and Church Life, *Chinese Recorder* 49(8), 1918, p. 496. “Three systems are receiving particular attention and rapidly growing in use; the Chu Yin Tzu Mu, the Government system of Simplified Chinese, the Kuan Hua Tzu Mu, prepared by Wang Chao and modified by Dr. Peill, and the Romanized.”
- (65) E. J. and S. G. Peill, The Scriptures in Phonetic for North China, *Chinese Recorder* 47(5), 1916, pp. 329-338.
- (66) Recommendations and Findings of Church and Missionary Organizations, *The China Mission Year Book 1918*, pp. 142-143. 中華統行委弁会は、1913年に組織された、プロテスタント教会の超教派的連合をめざす委員会である。山本澄子『増補改定版 中国キリスト教史研究』山川出版社、2006年、31-32頁参照。
- (67) News Items, *Chinese Recorder* 49(7), 1918, p. 488. Illiteracy and Church Life, *ibid.* 49(8), 1918, p. 496.
- (68) T. F. Carter, Phonetic Writing of Chinese, *Chinese Recorder* 50(1), 1919, p. 44.
- (69) News Notes, *Chinese Recorder* 50(3), 1919, pp. 208-209.
- (70) *Chinese Recorder* 50(12), 1919, p. 861.
- (71) New Methods, *Chinese Recorder* 51(10), 1920, p. 730. “Quite the most important advance in the past year has been the promulgation of the National Phonetic.”

- (72) Phonetic Reading in Foochow, *Chinese Recorder* 52(4), 1921, p. 284.
- (73) Interpretative Introduction, *The Chinese Church as Revealed in the National Christian Conference*, The Oriental Press, 1922, III. “[T]his Conference was the first really representative gathering of Protestant Chinese Christians in China.”
- (74) The Present State of Christian Literature in China, *ibid.*, p. 419. “The Phonetic system, with its thirty-nine symbols adopted by the Government, is spreading with phenomenal rapidity.”
- (75) Illiteracy and the Need for a Bible-Reading Church, *ibid.*, pp. 485-486.
- (76) 『平民教育運動小史』同朋舎、1985年。
- (77) Alex R. Mackenzie, A Concise Romanization. Proposed for uses in Conjunction with the Chinese National Alphabet, *Chinese Recorder* 55(4), 1924, p. 239.
- (78) Jottings, *Chinese Recorder* 55(7), 1924, p. 477.
- (79) P. Y. Chien, Tientsin “Mass-Education” Movement, *Chinese Recorder* 55(9), 1924, p. 613.
- (80) No Funeral Yet, *Chinese Recorder* 55(11), 1924, p. 751. “The remark has been made frequently of late that the National Phonetic Script is dead.”
- (81) Frank W. Price, The New Program of Religious Education in the Chinese Church, *Chinese Recorder* 57(1), 1926, p. 27. “Excellent tools for this work are found in the Thousand-Character series prepared by the Y.M.C.A., ... In most sections of China, the National Phonetic Movement seems to be on the wane, ...”
- (82) Illiteracy and the Need for a Bible-Reading Church, *The Chinese Church as Revealed in the National Christian Conference*, pp. 480-481. “[A] devil waiting for us, ... Who is that devil? He is Illiteracy. ... [U]nless we can drive this devil out of the Church we can never hope to see an indigenous Chinese Church; it is impossible. ... An ignorant Church can never be a strong Church. The Church which cannot read the Bible, the source of all power, that Church can never be a strong Church. ... This afternoon we have come together to discuss ways and means by which the Church in China may become a Bible reading Church.”
- (83) J. C. Yen, The Popular Education Movement, *The China Mission Year Book 1924*, p. 309. “‘To Make China’s Illiterate Millions Reading and Intelligent Citizens’ is the primary purpose of the Popular Education Movement.”
- (84) John Stewart Burgess, The Church as a Centre of Religious Culture and of Inspiration for Social Welfare, *Chinese Recorder* 46(7), 1915, p. 555. “The vocation of the ministry is proclaiming this gospel and the saving of individual souls, ... There has in recent years been another conception of the church, ... viz: the so-called institutional church. The ideal of this church is to become the social centre for all the activities of the community, to minister to the needs of all classes of people.”
- (85) Jun Xing, *Baptized in the Fire of Revolution. The American Social Gospel and the YMCA in China: 1919-1937*, Lehigh University Press, 1996, p. 20. (中国語訳) 邢軍著、趙曉陽訳『革命之火の洗礼 美国社会福音和中国基督教青年会1919-1937』上海古籍出版社、2006年、10頁。
- (86) Illiteracy and Church Life, *Chinese Recorder* 49(8), 1918, p. 497. “Any system to be finally acceptable must satisfy the Chinese sense of literary fitness and secure the co-operation of the Chinese Government and the people at large.”

- (87) Miss S. J. Garland, Promotion of Phonetic Writing in China, *The China Mission Year Book 1919*, p. 176. “[T]he system is readily learned, and, being entirely of Chinese origin and having the support of the National Ministry of Education, will appeal much more to Chinese literates and illiterates than any system, however theoretically perfect, which might be the product of foreigners.”
- (88) ウェイドに由来する表記システムが最終的に定着していった理由について周有光は、郵政、電報、海関、金融、国際貿易などをおもにイギリスが押えていたため、英語に近かったウェイド式が標準になったとする（周有光「漢字改革概論」『周有光語文論集』第一巻、上海文化出版社、2002年、28-29頁）。これに加え、ウェイドの編纂した教科書が中国にかかわったイギリス人に使われたことの意味が大きかったと思われる。
- (89) そのために発生した中国人信者と宣教師間のさまざまな軋轢については、蒲豊彦「宣教師、中国人信者と清末華南鄉村社会」『東洋史研究』62(3)、2003年で詳しく論じた。